

2018/03/04 先週のメッセージより

「神の慰め」

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」(マタイ 5:4)

悲しい出来事があった時や、苦しみ、病気、問題にぶつかった時など、神様に助けを求めて祈るなら、神様は必ず助けてくださいます。しかし、神の慰めとは、そのような見た目の慰めばかりではありません。神様は、もっと深い慰めを私たちに与えてくださいます。

この慰めを理解するためには、本当の悲しみとは何かを知る必要があります。悲しみや苦しみがなければ、慰めは必要ありません。表面上の悲しみや苦しみではなく、もっと深い悲しみや苦しみが見えるようになると、その先にある神様の慰めも見えるようになってきます。

■本当の悲しみとは

「人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれた心にだれが耐えるだろうか。」(箴言 18:14)

病苦よりはるかに苦しいと言われているひしがれた心とは、この地上で肉体が感じる悲しみや苦しみのことではなく、魂の苦しみのことです。それは、目に見える苦しみや悲しみに覆い隠されて、普段私たちには見えていません。

人は、神に似せて造られ、神のいのちが吹き込まれたことによって生きるものとされました。ですから、私たちの魂は神を知り、神を慕い求めています。人は、本来神と共に生きるように造られた存在です。しかし、罪によって神との結びつきを失った世界に存在している肉の体は、神ではなく、見えるものに安心を求めます。ここに戦いが生じているのです。これがひしがれた心の正体です。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらなくて、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」(ヨハネ 10:1-5)

羊とは、私たちの魂のことです。神様は私たちの魂に直接働きかけることができますが、この世のものは肉の体を通して、見えるものを求めるように誘いかけます。そして、魂が神のほうを向かないようにさせるのです。ところが、神のいのちで造られた魂は神を知っているので、神を求める思いとこの世のもので心を満たそうとする誘いとに心が分かれ、心の中

に虚しさが生じます。成功しても、素晴らしい評価を得ても、欲しいものを手に入れても、時間が経つにつれてなぜか心が虚しくなってしまうのは、そこに魂がついてこないからです。このような、神を慕い求める魂と、との争いこそ、人にとっての本当の悲しみなのです。私たちの魂が感じている悲しみとは、神様と結びつきたいと慕い求めているのに、肉の思いがそれを邪魔しているということです。

普段私たちが意識しているのは、この世界において見えている悲しみや苦しみです。ですから、見えるところが良くなるのが慰めだと思っているのですが、それは、見せかけであり、神様は、魂における本当の慰めを得させたいと願っておられるのです。

かつてイスラエルで大帝国を築き、巨万の富を得たソロモンは、「すべては空の空であり、虚しい。」と言いました。どんなに名誉や富を手に入れたとしても、そんなもので魂が神と結びつくことはないからです。ソロモンの結論は、「神を求めなさい」ということです。

安心を得ようとして神ではなく見えるものを求めた結果、人の魂は常に飢え乾き、虚しさの中に閉じ込められてしまっています。これが打ちひしがれた心なのです。これは人にとって、耐えがたい悲しみです。神様は、この悲しみを慰めると言っておられるのです。

■魂の悲しみへの慰め

神様が魂を慰めるとは、私たちが思い描くような方法ではありません。このことを知っておかないと、神様の福音が理解できず、つまずいてしまうことがあります。神様は、私たちの魂を慰め、平安を得させて、結びつきを強くするために、次のようになさることがあります。

1. 患難を静観する

私たちは、この世界で生きる限り、様々な患難に出会います。患難は神がもたらすものではありませんが、神様は、私たちの魂を慰めるために、あえてそれを静観することがあります。このことがわかると、私たちは「なぜ神は災いから助けてくれなかったのか」とつまずくことなく、患難の中にあって神の愛を見ることができるようになります。

私たちの魂が神様と結びつくことができないのは、安心を得ようと思って見えるものに心が向いているからです。私たちは、肉の思いに引かれて、見えるものや人のことばに安心や喜びを見出そうとし、結局は虚しさを感じることを繰り返しています。ですから、それを壊さない限り、魂は神のほうを向きたくても向くことができないのです。

私たちが日頃頼っているのは、見えるものによる安心です。患難とは、それを打ち壊すものです。災いや病気によって、自分の評判や健康や富が役に立たなくなると、私たちの魂は神のほうを向くしかありません。見えるところは確かにつらい状況なのですが、その時、魂は喜びを覚えているのです。

モーセは王子として過ごしていましたが、患難によって身分も富も権力も失い、砂漠で過ごすこととなります。頼るものがなくなってしまった彼は砕かれ、見えるものに頼ることをやめてしまいました。彼は、患難に遭ったことによって、神様に助けを求めることができるようになったのです。その時、神様はモーセに対して、「立ち上がり、同胞を助けに行きなさい

い」と命じたのです。

イスラエル国家の基礎を築いたヤコブは、患難によって、神に助けを求めることを知りました。神様に用いられた人々はみな、患難にぶつかって自分が背負って来たものが役に立たなくなる経験をしています。最終的に何も頼りに出来なくなり、「神様、助けてください」と叫ぶことが、私たちに慰めをもたらします。だから神は患難を静観するのです。

ある時、イエス様の弟子達が船に乗っていると、湖が嵐になってしまいました。この時イエス様は湖の上を歩いて船の近くまで来られましたが、ただ通り過ぎるつもりであったと聖書に書かれています。問題にぶつかって、自分の力でなんとかしようとおわてる弟子達に、神様に目を留めることをお示しになったのです。イエス様のお姿を見たペテロは、自分もイエス様のところまで行くことを願って水の上を歩き始めますが、不安に襲われて溺れそうになってしまいます。結局、ペテロは、どうにもならない状況に陥り、イエス様の手にしがみついて助けられました。

人は、患難にぶつかって初めて「助けて」と言えるようになります。魂にとっては、神様を求めるチャンスとなるのです。肉の思いには理不尽に聞こえるかもしれませんが、患難は喜ばしいことであり、神様はそれを静観なさるのです。

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」

(ローマ 5:3)

患難とはどうしても逃げ出すことができないつらい状況のことです。この時、人は自分と向き合わざるを得ません。これが忍耐です。これによって品性、希望が生み出され、自分を知ることができるようになり、神を求めていることに気づくようになるのです。これが私たちの希望であり、慰めです。

2. どうにもならない罪に気づかせる

神様は、私たちが自分の罪を知ることができるように、私たちを責め続けることがあります。御言葉に従えないことを示し続けたり、聖書を知らない人には、心の中に書き込まれた律法である良心を使ったりして、罪を認めさせようとなさるのです。

人は、責めずに愛することが慰めではないのかと思うかもしれませんが、本当の慰めとは罪に気づかせることなのです。なぜなら、本当に自分の罪に気がいたら、神様に助けを求めるしかないからです。もし自分には罪がないと言うなら、その人は神を偽り者とするのだと聖書は教えます。

私たちは健康で長生きすることを求めて、健康に良いと言われる食べものを買って、薬やサプリメントを飲み、病気が見つかるとう医者頼ります。私たちの魂は、ずっと医者であるイエス様のもとに駆け込みたいと願っているのですが、肉の思いがそれを邪魔しています。しかし、自分の手には負えない罪を抱えていることに気づくと、肉の思いも黙ってしまいます。肉の思いを黙らせる方法、それが患難と罪なのです。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。」(ルカ 18:13)

「神様、あわれんでください」と言えること、これが魂の慰めです。私たちを責め立てる神の律法は、私たちをキリストに導くための養育係であり、すべての人が罪の下に閉じ込められたのは、私たちが神様を信じる信仰を手にするためだと、聖書は教えています。つまり、自分はどうにもならない罪人だと気づかせて、自分には神様が必要だと気づかせることが、神の慰めなのです。そうすれば、魂は神様と結びついて平安を得、神様があなたを癒して、義を得させてくださるのです。

「シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」(ルカ 22:33-34)

ペテロは自分のことを立派な弟子だと思っていましたが、イエス様が捕らえられた時、イエス様の預言通り、三度イエス様を知らないと言ってしまいます。この時、ペテロは、ようやく自分の罪を自覚できました。「神様あわれんでください」と、魂が叫ぶことができるようになったのです。その魂の叫びはイエス様に届き、イエス様はペテロを見つめられました。

「主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。」(ルカ 22:61-62)

ペテロは、自分を見つめるイエス様の眼を見た時、それでもあなたを愛しているという主の愛を知り、神の義を得て、自分の罪が赦されていることを知りました。この時、ペテロの魂は安息を得たのです。この後、ペテロの生き方は180度変わりました。

イエス様は、ペテロを追いつめるために、あえてペテロの裏切りを預言なさいました。しかし、これこそが慰めの言葉なのです。私たちは自分の罪を知らされると、ダメだと言われているのだと受け止めてしまいがちですが、神様の意図は違います。神様は、神のもとに行きたくても肉の思いに邪魔されている私たちをあわれみ、本当に罪が自覚できたら肉の思いも邪魔できないから、助けを乞うことができるように罪を指摘なさるのです。こうして魂は安息を得ることができるのです。

3. 弱さを認めさせる

私たちは、弱さを表すことは恥だと思い、富や名誉などで弱さを隠し、自分は立派で強いと思い込んで、自分の弱さを認めようとしません。しかし、人はみな弱いものです。たとえ

ば、怒りを表すのは、弱さの表れです。怒るのは、自分は特別だという意識の表れであり、自分を強く見せようとする行為です。それは、弱さの裏返しです。弱いから、人の目を気にして怒るのです。

この世界に強い人などいません。みな誰かの助けを必要とする存在であり、何かにしがみついて安心を得ようとしています。自分を強いと思わせてくれるものにしがみつき、自分は強いと思いついでいるだけです。

そこで、神様は、自分が弱いことを私たちが受け入れられるように、あえて祈りを無視することがあります。私たちの祈りは、肉の願望を満たすための祈りほとんどです。その祈りに答えると、私たちが自分の弱さに気づくことができないからです。

パウロは何らかの持病を抱えており、神様に病が癒されることを求めましたが、かないませんでした。なぜ神様はパウロの願いを無視したのでしょうか。それは、病を抱えていることによってパウロが自分の弱さを自覚して、神に祈らなければ生きていけない状況に置き、パウロが神に頼ることによって、神の恵みがパウロの中に大きく働くためでした。

パウロは自分の弱さを認めたくはありませんでした。しかし、このことを教えられてからは、自分の弱さを誇れるように変わったのです。パウロの見えるところの祈りは聞かれませんでした。それによって、本当の願いである魂の願いは聞かれていたのです。

「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

(Ⅱコリント 12:7-10)

■本当の慰めを受け取る

私たちの魂は、患難を通して、神様としっかり結びつくことができるようになることで、慰めを受け、安息を得られます。このことがわかると、祈ってもなぜ聞かれないのかという疑問は消えていきます。聖書が、すべてのことは益とされると教えているのは、このことです。

神様が、私たちの本当の悲しみを慰めてくださる方法は、私たちが想像する慰めとは全く異なり、一見すると、神から訓練を受け、むち打たれているように思われます。しかし、その目的は、神様としっかり結びつき、魂が本当の平安を手にするところにあるのです。

「そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」（ヘブル 12:5-7, 11）

魂の安息、これが神の慰めです。患難を静観し、どうにもならない罪に気づかせ、弱さを認めさせることを通して、肉の思いは力を失い、魂は神に結びつくことができるのです。ここに神の本当の慰め、本当の安息があるのです。

こうしたことがわかるようになると、今まで理解できなかった福音がわかるようになり、神様への感謝がこみあげてきます。人の本当の苦しみ悲しみは、神と結びついていないことなのです。